

論文の内容の要旨および論文審査の結果の要旨

学位申請者氏名：相良 由美子
学位の種類：博士（保健福祉学）
学位記番号：博(健)甲第19号
学位授与年月日：平成31年3月5日
審査委員：主査 高崎健康福祉大学教授
副査 高崎健康福祉大学准教授
副査 医療人崇徳会こころのクリニックウィズ所長
地域精神保健研究センター長
千葉 千恵美
池田 朋広
後藤 雅博

論文題目

家族の感情表出（expressed emotion）と知的障害を合併した自閉スペクトラム症児の問題行動との関連

Family expressed emotion and aberrant behaviors of youths with both autism spectrum disorder and intellectual disability.

【論文の内容の要旨】

知的障害や自閉スペクトラム症（Autism Spectrum Disorder：以下 ASD）児は、環境刺激に反応して自傷や他害などの問題行動を呈することがある。対応に苦慮した家族が疲弊すると必然として否定的な関わりが増え、さらに児の問題行動がエスカレートする悪循環が生じる場合も少なくない。家族が表出する感情的態度を実証的に評価する指標として、家族の感情表出（Expressed Emotion：EE）が挙げられる。EEは精神障害や慢性疾患のケアにあたる家族が患者に対して表出する感情を測定することで評価され、特に高い「批判（criticism）」や敵意、過度の「感情的巻き込まれ（Emotional Over Involvement）」が、統合失調症の再発と有意に関連する予後予測性が確立されている。様々な精神疾患や知的障害・発達障害の転帰との関連も積み重ねられ、障害児の家族のEEは高く、攻撃的問題行動などと関連するという指摘がある。しかし、地域で生活する知的障害を伴う ASD 児に特定し、障害児が示す問題行動と家族のEEとの関係を多数例で調査した研究は日本では少ない。

本論では、I章で背景となる概念と先行研究について文献的総説を行い、研究の目的と仮説を提示した。II章では、自宅で ASD 児と生活する家族の EE の特徴を把握するため、EE に関連する因子を知的障害のレベルや合併症の有無などを含めて探索的に検討した。また、知的障害を伴う ASD 児の問題行動と家族の EE は相互に関連しているという仮説検証を目的として、問題行動プロフィールを従属変数とした統計解析を行った。III章では精緻な EE 評価法である FMSS（Five-Minute Speech Sample）を概観し、批判とともに重要な EE 構成要素である EOI、およびその下位尺度である境界線級 EE や肯定的関係性を FMSS で評価し、問題行動との関連を再検証した。また、家族の生活の質 quality of life（QOL）との関係を併せて検討し、半構造面接による語りをもとに家族の実態や必要な保健福祉的支援について質的に分析した。IV章では、研究結果を ASD 児の問題行動の軽減や家族支援に繋げるため、

家族心理教育を含め、今後求められる保健福祉支援と施策について考察した。

第1研究では、知的障害を伴い地域生活しているASD児が示す問題行動のプロフィールをAberrant Behavior Checklist-Community (ABC-J)「異常行動チェックリスト日本語版」を用いて事業所職員が客観評価し、FAS (Family Attitude Scale)により対象家族のEE評価(批判度)を自記式で調査した。対象は放課後等デイサービスに通う児と同居する家族58名(母親56名、父親2名)だが、均質性に鑑み母親56名について分析した。児は男性38名、女性18名、平均年齢は11.3歳、療育手帳の判定区分は軽度13名、中度・重度18名、最重度5名、手帳なし2名であった。FASと基本属性との関連では、批判度は服薬児と同居する家族で有意に高かった。ABC-J各尺度でFASと有意な正相関を認めたのは、「常同行動」、「興奮性」、「多動」の3因子であった。重回帰分析の結果、FASによる批判度は「常同行動」と直接的に関連していた。一方、「興奮性」には療育手帳の判定区分、「多動」には服薬の有無、「不適切な言語」には児の年齢が、それぞれ有意な独立変数として抽出され、問題行動プロフィールにより影響を与える因子が異なることが示された。ただし低い適合度を踏まえると、この変数だけで問題行動を説明するには無理がある。以上よりEEは服薬と関連し、受療に伴う煩雑さや不安が影響している可能性がある。またEEは多動や興奮性と関連し、特に家族の批判度が低下すれば、常同行動(こだわり)が軽減される可能性も示唆された。

第2研究では、FMSS-EEによる下位項目「批判や不満」、「自己犠牲・過保護や賞賛の言葉などEOI」、「肯定的関係性」の分布と、全般的EE(low/high)による問題行動の比較、境界線級EEを高EEに含めた検討(偽陰性への対応)、批判およびEOIのレベルと問題行動との関連を詳細に検証した。またQOL調査票(WHO QOL26)を用い、FMSS-EEとの関連性も検討した。その結果、high-EEは5名(25%)で、境界線級(b-EE)も含めると12名(60%)に上昇した。また、知的障害を伴うASD児の「常同行動」と、EE構成要素(批判や肯定的関係性)が有意に関係することが追認された。さらにEEカテゴリー評価では「無気力」との関連性が、批判・不満を包含したディメンジョナル評価では「興奮性」「無気力」「常同行動」との相関が、また肯定的関係性と「不適切言語」との関連性が示された。第1研究で示された批判の影響に加え、EOIは異なる結果を示すことも予想されたが、EOI単独では有意な症状との関連は認めず、QOLとEEとの関係性も示されなかった。これには症例数の少なさ、EOI評価の複雑さ、QOLにかかわる他の要因の検討といった限界と課題が関係していると考えられた。これらの結果から、問題行動は家族のEEと相互に影響しあい、特に母親の高EE(特に批判)は限局的で奇異な反復動作を強め、肯定的関係はそれを緩和する可能性が示唆された。最後に母親に対して半構造化面接を行い、生活上の困難、児や家族への保健医療福祉支援として今後望まれるケアに関する語りを質的に分析した。その結果、ASD症状への理解や対応の促進、受療負担の軽減、社会資源や余暇の不足、父親や兄弟の参画促進と心理的サポート、社会的障壁の低減ニーズがカテゴリー化された。

以上より、ASD児の問題行動の背景にある病態理解を促進し、かかわり方や困りごとへの対処法を獲得することで、EEや家族関係が肯定的に変化し、さらに問題行動が軽減する

という連関が想定される。この仮説に基づいた家族心理教育の実践とエビデンス検証と同時に、社会参加を促す保健福祉的支援や施策の充実に求められると結論付けている。

【論文審査結果の要旨】

本論文は、系統立てた2つの量的研究と1つの質的研究により構成されており、充実した論が完遂されている。研究方法に大きな問題はなく、結果の解釈も妥当である。家族の感情表出と知的障害を併存した自閉症児の行動問題を明らかにし、家族の持つ感情を提示している。家族の批判的対応を低下することで子どもの示す常同行動も低下することを示した。

家族の持つ感情に着目した上で、自閉症の特徴を捉えた家族の疲弊しない関わり方や関係性を見いだしたことは、精神保健領域で大変優れたレベルの研究と言える。

2月5日午後に、学位申請者による本論文内容のプレゼンテーションおよび3名の審査委員による質疑が2時間弱にわたり行われた。そこでは家族の持つ感情を実証的な分析した研究であると高い評価がなされた。特に日々養育の主となる母親に着目し、生活上の困難さまだ子どもや家族への保健医療福祉としてのあたりを分析し、これらの関わりから家族への支援を包括的に明らかにしたことは大きな成果である。その一方では再検討としては、家族が抱える母親一人の負担について対応が議論された。また医療がこのような知的障害を持ち自閉症児や親に近い形で提供することや医療によるアウトリーチの必要性など関わりかた要因の考察も今後の課題として指摘された。

最終報告会ではこうした点に加え、家族関係性を支える行政、医療機関、教育機関、インフォーマル、フォーマルを含め社会資源を活用していくことも重要であるという意見が出された。

総括すると、主題設定は適切で興味深く先行論文を充分総説し、対象と方法は妥当であり、得られた結果に基づく考察の論理的記述は適切であること、研究倫理上の問題はなく、質疑に対して今後の課題や展望にも返答できていることが確認された。

以上により、論文審査および最終試験の結果に基づき、審査委員会において慎重に審査した結果、本論文が博士（保健福祉学）の学位に十分値するものであると判断した。